「COVID-19困窮工学生支援制度」支援募金ご協力へのお礼ならびに工学部・工学研究科の近況

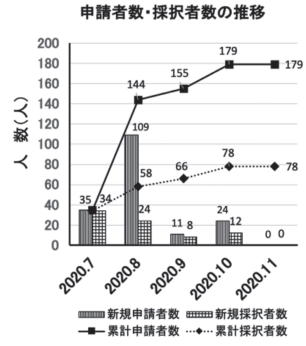
工学研究科長・工学部長　長崎　健

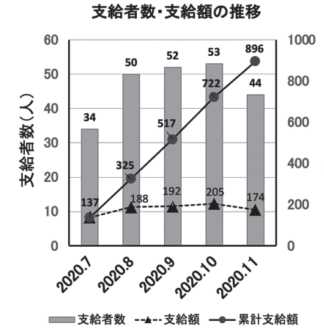
先日、故佐藤前研究科長行きつけの河島寿司に行く機会がありました。あれから３年あっという間に過ぎようとしていることを実感すると共に、工学研究科内の変革、そして大学の変革に取り組んで来たことが小さい事だと感じてしまう程のCOVID-19による社会変革が現在進行しています。激動の一言では片付けられませんが、同窓生の皆様におかれましては個々の立場でこの大波を乗り越え、新生活様式に対応されていることと存じます。

10月21日、新大学に向け文科省設置審への必要書類提出も無事終わり、市大工学執行部としての活動も一年半余りを残すのみとなりましたが、引き続き貫上副研究科長、川合教育研究審議員と共に新大学での工学研究科をより魅力あるものとすべく教員の皆さんと力併せ努めています。

先ずは教員異動のお知らせです。本年３月に、辻本浩章教授、横山俊祐教授、杉山久佳准教授が定年でご退職、また林和則教授と吉岡真弥准教授が転出、ガヴァンスキ江梨准教授もご退職された一方、４月には野口博史准教授（スマートセンシング）、増田勇人講師（熱プロセス工学）、西野雄一郎講師（建築計画）、林厳助教（橋梁工学・鋼構造）、またクロスアポイントメント制度により黒田智子教授（建築史）、藤本恵美子助教（熱プロセス工学）が着任されました。また、徳尾野徹教授、鈴木裕介准教授、蕭 閎偉准教授、吉本佳世講師が昇任され、教員の新陳代謝も進んでおります。さらに、10月には大森健史准教授（流体工学）とクロスアポイントメントによる高井飛鳥助教（機械力学）が着任し工学部・工学研究科の教育・研究体制のより一層の充実強化に努めています。残念なことに８月、原晋介教授（情報通信工学）が不慮の事故により急逝されました。心より哀悼の意を表します。

学生の動向ですが、平成31年度に学部269人、修士200人、博士７人が巣立つ一方、今年度は学部300人、修士202人、博士８人の新入生を迎え入れました。平成26年度からスタートしました博士課程リーディングプログラムは昨年度で文科省からの支援が終了しましたが、自主運営でプログラムは継続しており、産業界でリーダとなりうる人材育成を引き続き遂行しています。同窓会にはこのリーディングプログラムをはじめ、米国ウィスコンシン大学短期研修





プログラムに対して経済的支援を頂いていましたが、今年度はCOVID-19により困窮する工学部生・院生に対する工学独自の支援制度に対し基金からの寄附並びに「COVID-19困窮OCU工学生支援募金」に対して同窓会の皆様から多大なる支援を頂きました。改めてこの場をお借りしまして深謝申し上げます。コロナ禍により経済状況が一変し経済的に困窮学生が多発する中、研究室活動と並行してのアルバイトが困難であるなど工学生ならではの窮状が浮かびあがり、工学部・工学研究科では在籍する学生への支援策として「経済的な理由により修学を諦めなければならない学生を一人も出さない」の精神のもと制度設計を行い、運営を行っています。支援額は困窮度に応じ１ヶ月３もしくは５万円とし、６月に最初の募集を開始し、７月から11月までの期間において累計78名に総額896万円の給付を行いました。詳細は『申請者数・採択者数の推移』および『支給者数・支給額の推移』をご覧ください。学生たちは、少しずつですが、アルバイト収入を増やしたり、各種財団等の奨学金に応募したりと逞しく適応しているようです。月毎の新規申請者数も減少し、支給額もある程度一定しており今年度いっぱいは運用の目途が立っている状況です。『「COVID-19困窮OCU工学生支援制度」支援募金』へ寄せられた同窓生からの暖かく心強い支援は工学生にとっては学業を継続する上で心強い後ろ盾になっています。改めまして感謝申し上げます。この危機を乗り越え逞しく成長した工学生達が社会のために活躍することを信じ、教員一同鋭意学生達の指導を行ってまいります。今後とも同窓生の皆様にはご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

（工学研究科長・工学部長）